

寺田寅彦

感覚と科学



感觉と科学

近代の物理学は、自然を研究するための道具として五官の役割をなるべく切り詰め自然を記載する言葉の中からあらゆる人間的なものを削除する事を目標として進んで来た。そうしてその意図はある程度までは遂げられたように見える。この「anthropomorphism」からの解放」という合い言葉が合理的でまた目的にかなうものだということとは、この旗じるしを押し立てて進んで来た近代科学の収穫の豊富さを見ても明白である。科学はたよりな

い人間の官能から独立した「科学的客観的人間」の所得となつて永遠の落ちつき所に安置されたようにも見える。

われわれ「生理的主観的人間」は目も耳も指も切り取つて、あらゆる外界との出入り口をふさいで、そうして、ただ、生きていくことと、考えることとだけで科学を追究し、自然を駆使することができないのではないかという空想さえいだかせられる恐れがある。しかし、それがただの夢であることは自明的である。五官を杜絶とぜつすると同時に人間は無くなり、従つて世界は無くなるであらう。

しかし、この、近代科学から見放された人間の感覚器を子細に研究しているものの目から見ると、これらの器官の機構は、あらゆる科学の粋を集めたいかなる器械と比べても到底比較にならないほど精緻せいちをきわめたものである。これほど精巧な器械を捨てて顧みないのは誠にもつたいないような気がする。この天成の妙機を捨てる代わりに、これを活用してその長所を發揮するような、そういう「科学の分派」を設立することは不可能であろうか。こういう疑問を起こさないではいられないほどにわれわれの感覚器官はその機構の巧妙さによってわれわれを誘

惑するのである。もしも、そういう学問の分派が可能だとすれば、それはどういう方面にその領域を求めらるべきであろうか。この問題より前にまず五官による認識の本質的特徴に注目する必要がある。

思うに五官の認識の方法は一面分析的であると同時にまた総合的である。たとえば耳は音響を調和分析にかける。そうして、めんどろな積分的計算をわれわれの無意識の間に安々と仕上げて、音の成分を認識すると同時に、またそれを総合した和弦かげんや不協和音を一つの全体として認識する。また目は、たとえば、リヒテンベルグの陽像

と陰像とを一瞬時に識別する。これを客観的に識別しようとするればめんどろな分析法によって多数の係数を算出し、さらにそれを統計にかけて表示しなければならぬ。

さらにまた、盲人の触感は猫の毛の「光沢」を識別し、かんぞうし 贗造紙幣を「発見」する。しかし、物の表面の「粗度」

の物理的研究はまだようらん 揺籃時代を過ぎない。これほどに有力な感官の分析総合能力が捨てて顧みられない一つの理由は、その与えるデータが数量的でないためである。しかし、数量的のデータを与える事が必ずしも不可能とは思われない。適当なスケールさえ作ればこれは可能にな

る。たとえばピアノの鍵盤けんばんや、オストワルドの色見本は、言わばそういう方向への最初の試歩である。金相学上の顕微鏡写真帳も、そういうスケールを作るための素材の堆積たいせきであるとも言われよう、もし、あの複雑な模様を調和分析にかけた上で、これにさらに統計的分析を加えれば、系統的な分類に基づくスケールを設定することも、少なくとも原理的には可能である。これにやや近いものを求めれば、指紋鑑別のスケールのごときものがそれである。「あたわざるにあらず、成さざるなり」と言ってもさしつかえはないであろう。

それはとにかく、感官のもう一つの弱点は、個人個人による多少の差別の存在である。しかし、われわれは「考える器械」としての個人性を科学の上に認めている。「見る器械」、「聞く器械」としての優劣の存在を許容するのもやむを得まい。高価な器械を持つ人と、粗製の器械をもつ人との相違と本質的に同じとも言われる。多くのすぐれた器械の結果が互いに一致し、そうしてその結果が全系統に適合する時に、その結果を「事実」と名づけることがいけなければ、科学はその足場を失うであろう。

もう一つの困難は、感官の「読み取り」が生理的心理

的効果と結びついて、いろいろな障害を起こす心配のあ
るということである。これはしかし、修練による人間そ
のものの進化によって救われないものであるうか、要す
るに観測器械としての感官を生理的・心理的効果の係^{けいてい}蹄か
ら解放することが、ここに予想される総合的実験科学へ
の歩みを進めるために通過すべき第一関門であろうと思
われる。

(昭和八年八月、科学)

日本文学電子図書館

感覚と科学

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第四卷
岩波文庫、岩波書店

昭和41年7月10日 第24刷発行



日本文学電子図書館